

瀬戸内海沿岸の神社における既存の氏子圏を越境した

新たな海のネットワークの構築に関する研究

渡邊 大志^{※a} 泉川 時^{※b} 吉川 伊織^{※b}

概要 (MS 明朝 10.5P) 本研究では、瀬戸内海域に立地する宇佐八幡宮に着目する。宇佐八幡宮は大分県の宇佐神宮を総本社とする八幡信仰の神社である。八幡信仰ではその御祭神の神功皇后の三韓征伐の伝承により戦勝や海上交通の御神徳があるとされる。瀬戸内海域に立地する宇佐八幡宮 30 社のネットワークを活かし、それぞれの氏子圏を相補的に自治するような新たな氏子圏の編成を提唱する。

研究背景と目的 (MS 明朝 10.5P)

申請者は『東京臨海論』(東京大学出版会,2017) ^{※1}を著し、港湾ネットワーク(開放系港湾)など海の領域論(テリトリー)に関する十分な実績を持つ。さらに、高松市香西の宇佐八幡宮で宮司をしながら、神社のネットワーク研究を専門とする泉川時を共同研究者として迎えている。既に高松市の宇佐八幡宮での現地調査を複数回に渡って実施し、同八幡宮及び周辺地域の歴史の十分な理解と氏子である地元民との人間関係を構築している。そこで、本研究では、特に調査環境が整っている高松市香西の宇佐八幡宮の氏子圏と瀬戸内海に立地する宇佐八幡宮 30 社に着目する。すでに、神社の練物(獅子舞や飾り船など)と神楽の奉納時に使用する幟旗をデザインするなど、主に海を介した新たな氏子圏の構築とそれを目指したデザインエレメントの生成に既に着手している。

以上のように申請者は神社の資料および自治会長をはじめとするステークホルダーとなる人物との人間関係も既に構築している等、研究の基盤は整っていると云える。

人口減少社会における、地域の衰退は深

刻化しており、個別の地域での自力での解決に委ねるのではなく、構造的な見直しといくつかの地域圏をまたいだ広域文化圏が必要とされる。本研究ではそこで、神社のネットワークに着目する。全国におよそ 8 万社ある神社は、一部の崇敬神社を除き、それぞれが守護する範囲である氏子圏をもち、その小さな単位で地域自治がされている。他方で、神社には御祭神による信仰の系統があり、大きな神社から勧請してもらうことで、そのネットワークが広がっていくような例もみられる。

本研究で着目する、高松市の宇佐八幡宮もその一つである。瀬戸内海を超えて、大分の宇佐神宮から分霊・勧請が行われたように、陸の行政圏を超えた独自の海のネットワークが形成されてきた。

増田寛也の「消滅可能性都市」^{※2}に挙げられるように地方消滅の危機を見据え、各地域に存在する神社の氏子圏の内外のネットワークに着目することで、各神社の氏子圏が連帯して一つの大きな氏子圏を形成するような海の文化圏域の構築を目的とする。

※a 早稲田大学 教授 ※b 早稲田大学 助手

研究成果と考察 (MS 明朝 10.5P)

本研究では、海の文化圏域の構築に向けて、具体的に以下の 3 点の目的を明らかにする。

- ①神社の空間形態と創建史に基づく氏子圏のデザインエレメントの抽出
- ②神社の祭事と自治会の関係にみる氏子制度の運営手法
- ③瀬戸内海を介した氏子圏の越境モデルの編成

特に瀬戸内海の宇佐八幡宮 30 社の中でも、高松市香西本町に立地する宇佐八幡宮は継続的に調査を続けている。本宇佐八幡宮では、特に研究目的の①に挙げる新たな氏子圏の構築を目指したデザインエレメントの生成として、2 月節分祭、4 月塩竈祭、7 月白峯祭、12 月庭燎祭の 4 つのオリジナル神事を企画していた。2026 年現在、全ての神事を実施することが叶い、一定の成果を得ることが出来た。新たな氏子圏の構築の一助となるように、今後氏子による自走式で神事が継続的に実施されるように進めることが、引き続きの課題である。また、それぞれ 4 つの神事は、高松市宇佐八幡宮の氏子だけでなく、土地に縛られず他地域からやってきた氏子の協力のもと支えられている。今度はこのネットワークを宇佐八幡宮 30 社にも広げていくことが必要である。

2024 年 6 月には、愛媛県松山市の宇佐八幡宮と岡山県井原市宇佐八幡宮のフィールドサーベイ、及び各社の宮司へのヒアリング調査を先行して行っている。(松山市・伊佐爾波神社野口宮司、井原市・宇佐八幡神社神崎宣武宮司) 特に、井原市・宇佐八幡

神社の神崎宣武宮司は、神職を務めながら、民俗学者として自身の氏子圏の制度に関する記録も残している※3。フィールドサーベイでは、高松市から松山市、伊原市と陸海を超えて各拠点を巡っている。かつては個別の瀬戸と灘で認識され、「瀬戸内海」という枠組み自体が近代化していく過程で外国人の目によって獲得された概念である。その風景観にも表れているように、瀬戸内海を横断すると幾つもの層が折り重なっている様子が読み取れる。松山市の宇佐八幡宮は道後温泉とも程近い立地にあり、日本に 3 社しかない八幡造の本殿を持つ伊佐爾波神社が管理する神社である。同じ八幡信仰であるにも関わらず、敢えて別に宇佐八幡宮を造営しているところに松山の気風が読み取れる。一方で、伊原市の宇佐八幡宮は周辺の家並みが揃って田畑が広がる中世的な景観が残る山村である。そして高松市の宇佐八幡宮は市内の北西部、瀬戸内海沿岸に立地し、中世に栄えた港町であるが、現在は商店街のある中心市街地に対する郊外住宅地的な位置付けが強まっている。それぞれのコンテキストは異なる一方で、宇佐八幡宮をわざわざ名乗っているところに共通性を見出せる。松山市では地元の由緒を持つ伊佐爾波神社に対する外来の「宇佐」の扱いの低さ、伊原市では元の城山と同じ高さに建てた宇佐八幡宮と地域との水平な関係性、高松市では地元豪族が勧請して象徴的に郷の中心に創建した外来の「宇佐」の扱いの高さが窺える。

2024 年 11 月には氏子圏を越境した交流のスタートアップとして、日本全国の宇佐八幡宮の最北端に位置する宮城県の宇佐八幡宮及び高松・宇佐八幡宮が位置する土地を明治期におさめていた高松藩の藩主、生

【様式 2】

駒家の墓がある秋田県龍源寺に獅子の奉納を行った。この行事は高松・宇佐八幡宮で奉納している本津獅子組のメンバーが、生駒家への御礼の気持ちを込めて実施したものであり、宗教の垣根を超えた奉納をしている。

2025年5月3-11日には瀬戸内海域の宇佐八幡宮調査として、愛媛県今治市、西条市、岡山県瀬戸内市、高梁市の宇佐八幡宮の調査を実施した。あわせて、高松市宇佐八幡宮では周辺の寺院等の視察を行なった。

2025年5月19-25日には瀬戸内海域の宇佐八幡宮調査として、徳島県鳴門市、岡山県和気町の宇佐八幡宮の調査を実施した。あわせて、高松市宇佐八幡宮では神功皇后伝説等の八幡研究をされている別府大学民俗学の福西先生と意見交換を実施した。本調査をもって、助成前に実施していた調査と合わせて、瀬戸内海域にある宇佐八幡宮全30社の現地調査並びにヒアリング調査が終了した。これによって、研究目的②神社の祭事と自治会の関係にみる氏子制度の運営手法に関して把握することができた。これらの成果については別途査読論文として申請中であるが、氏子圏規模に応じて神社の空間特性、年中行事、組織体制も豊富になる傾向が明らかになった。

また、2025年11月14-17日に大分・宇佐神宮に宇佐神宮での氏子制度の再調査と、800年前に大分・宇佐神宮から瀬戸内海を渡り、高松・宇佐八幡宮へ勧請された歴史を辿り、高松・宇佐八幡宮氏子の獅子連による獅子の奉納を目的に再訪した。それに先立ち、この勧請の歴史を題材とした動画を作成し、瀬戸内海を介した氏子圏を可視化するためのデザインエレメントとしている。また、この奉納と記録自体も動画とし

て編集し、高松市宇佐八幡宮の氏子地域の1つを拠点とする香西観光協会よりyoutubeに公開している。大分の宇佐神宮は、瀬戸内海域に立地する宇佐八幡宮30社の大元であり、今後このネットワークを活かし、それぞれの氏子圏を相補的に自治するような新たな氏子圏の編成を提唱するためには連携が必要不可欠である。その連携の第一歩として、今回の奉納は成果だといえる。奉納に際しては、宇佐八幡宮の創建の縁起に登場する「神人」「装束家」の同行もあり、歴史的にも意義のある行事になった。「神人」とは大分の宇佐神宮から勧請した際の船に乗ってきた神職の一族であり、「装束家」はそれを高松市の笠居郷にて受け入れて休憩してもらい、装束を整えた家だと伝わっている。この特別な家は現在まで800年間続いており、秋季例大祭では神人は神事の指揮を司り、装束家は練り物及び行列の指揮を司っている。こうした地域の中で連続した歴史として受け継がれた宇佐神宮のコンテクストを、実際に氏子と共に訪れて再確認することで、地域の紐帯の結束を強めることができた。

研究目的③瀬戸内海を介した氏子圏の越境モデルの編成の達成のためには、ドイツ人のジャーナリスト・建築家であるマーティン・ポール氏に研究の一部で協力を得ている。従来の氏子は、神社の周囲の氏子圏に住む住人のみが対象であった。そこで我々は、宇佐八幡宮30社のネットワークを活かした土地に縛られない新しい氏子のスタイルを「スーパー氏子」と名付けた。研究当初は、判然としていなかった瀬戸内海域に立地する宇佐八幡宮30社のネットワークを「スーパー氏子」として整理することが出来たことは大きな成果である。その「スーパー氏子」の第一号として、マーティン・ポール氏に2024年12月、瀬戸内海

【様式2】

圏及び高松・宇佐八幡宮の取材を行ってもらった。ポール氏は、ドイツのウェブジャーナルへ今回の取材に関する記事の掲載を予定している。また、ポール氏の協力のもと、ベルリンで研究成果の発表を目的とした展覧会を2027年6月(予定)に実施する計画を模索している。2025年9月にはオンラインでポール氏と展覧会の実施に関して打ち合わせをしている。こうした活動によって、土地・人種・国籍といった従来のカテゴリーに縛られない「スーパー氏子」を増やす方法を考察している。

2025年2月2日には、高松市香西コミュニティセンターで、高松・宇佐八幡宮の氏子に対して講演会を実施し、「スーパー氏子」という考えについて共有をした。また、マーティン・ポール氏にも発言をしてもらった。2026年1月31日は、高松市香西小学校にて、今後の活動に関して講演を行った。

参考文献 (MS 明朝 10.5P)

※1 渡邊大志.『東京臨海論』.東京大学出版会.2027年

※2 増田寛也.『壊死する地方都市』.中央公論 2013年12月号.中央公論社 2027年

※3 神崎宣武.『神主と村の民俗誌』.講談社.2019年